

研究ノート

calum 「さくらんぼ」の語源について

久保 博

1. 初めに

ロマンス語学において、方言ごとに異なる植物の名称とその語源には、19世紀以来継続して一定の関心が払われてきた。本研究では、主にイタリア・ロンバルディア州マントバ県の *Viadana* 周辺で使われている「さくらんぼ」を意味する *calum* [ˈkalum] の語源について議論を行う。

2. *calum* の語源に関する先行研究

マントバ周辺の言語変種に関して *calum* だけでなく *calem* など同じく「サクランボ」を意味する非常に語形が似た語彙が存在している。(4.2.参照) その中の *calem* という語彙の語源についてふれられている *Badiali* (1983) では、主に意味の変化に焦点が当てられ、ラテン語の *CALĀMU(M)* から派生し、「小枝」「竿」「ペン」「接ぎ木」>「ペンの形をした接ぎ木の枝」>「サクラの一種(木)」>「その実(サクランボ)」と、徐々に意味が変化したという仮説が提案されている。

意味的類似性及び地理的近接性から、本研究では *calem* と *calum* は語源を同じくすると仮定したうえで議論を進める。

現在、ロンバルディア州の *Viadina* では「サクランボの一種の果物」を表しているのではなく、「サクランボ」一般を表しているように思われるが、それについてここでは触れない。

先行研究では、意味変化ばかりが扱われており、19世紀以来の語源研究において最重要視される「音変化」の側面からは一切触れられていない。実際、*calum* では *CALĀMU(M)* と比べて著しく語形が変化しているので、音変化の側面からも妥当であるかどうか考察してみる必要がある。

3. 本研究で提案する仮説

本研究では、以下のように変化が起こったと仮説を立てる。

CALĀMU(M) > *calmo* > **calm* > [kalum]

ラテン語源 *CALĀMU(M)* が [kalum] とする過程において三つの現象が起こったと仮定する。

- ① まず L と M の間の低母音の脱落がおこる。
- ② 語末母音が脱落する。
- ③ その後 L と M の間に語源にない母音が挿入される。

強調しておきたい点は、L と M の間の母音は語源の低母音が変化したものではなく、一度母音が消失し、同じ位置に語源にない母音が挿入されたということである。確かにロマンス語では、同じ位置にある低母音が高母音に変化する例もあるが、後に見るように、他のロマンス語において知られている CALĀMU(M)から派生した語を考慮に入れた場合、一度母音が脱落し、同じ位置に語源にない母音が挿入されたと考えるほうが妥当であると思われる。

4. 予備知識

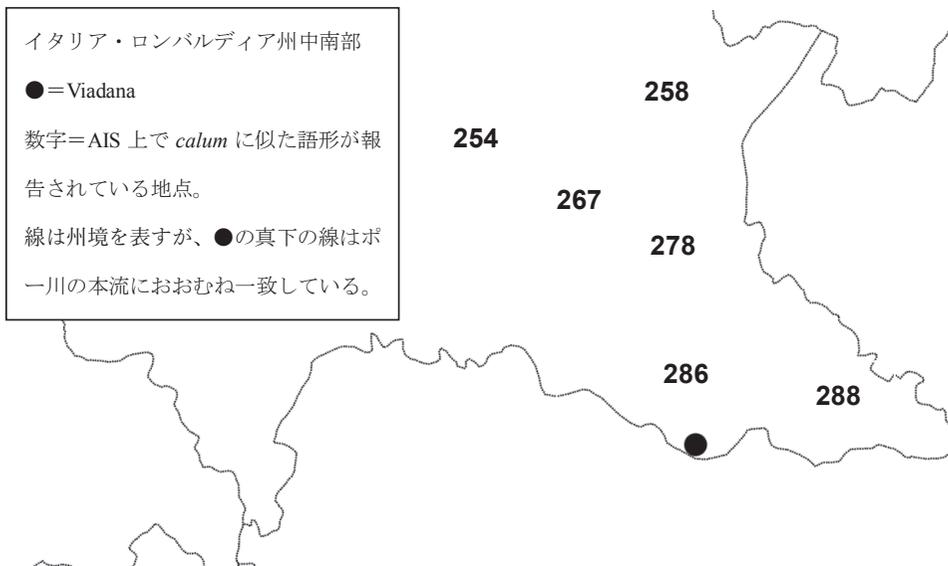
本章では、*calum* の語源について議論を行うにあたって必要な予備知識を示す。

- Viadana の言語変種について (4.1.参照)
- AIS におけるデータ (Band VII, Karte 1282, la ciliegia) (4.2.参照)
- REW におけるデータ (CALĀMU(M) の変化形) (4.3.参照)

4.1. Viadana の言語変種

Viadana はロンバルディア州マントバ県のコムーネであり、ポー川に隣接し、川向うにはエミリア・ロマーニャ州が広がっている。(図1参照)言語変種はLoporcaro(2009), Foresti(1985), Pellegrini(1977)などの研究者によるとエミリア方言に属するとされているが、地理的に近いことからロンバルディア方言の特徴もみられる。広域的な観点からみるとエミリア方言もロンバルディア方言もガロ・ロマンス語に属している。

図1



4.2. AIS におけるデータ (Band VII, Karte 1282, la ciliegia)

AIS では言語地図の左手のコラムに「サクランボ」の亜種として *calum* とそれに類似した語形が報告されている。(主にロンバルディア州東部に集中。) 地点 278 と 286 では植物の特徴が示されている。それぞれの地点の位置については図 1 を、データについては表 1 を参照のこと。

表 1¹⁾

地点	地名	データ
254	Martinengo (BG)	'ka:lɛm
258	Lumezzane (BS)	'ka:lɛm
267	Dello (BS)	'ka:lɛm
278	Solferino (MN)	l 'ka:lɛm (rot, süsßer als "la seraza")
286	Bozzolo (MN)	ɛl 'ka:lɛm, -lum (weiss, rosa, rot oder schwarz)
288	Mantova (MN)	'ka:lɛm (rot)

4.3. REW におけるデータ (CALĀMU(M)) の変化形

CALĀMU(M)から派生した語は、ロマンス語において様々な意味で使われている。(表 2 を参照のこと。) しかし、「サクランボ」という意味も *calum* という語形も記録されていない。

表 2

伊語	<i>calmo</i>	「接ぎ木」
伊語	<i>calamo</i>	「ペン先」
カラブリア方言	<i>calamu</i>	「稲などの切り株」
シチリア方言	<i>kalamu</i>	「絹の一種」
ログドローロ方言	<i>kalamu</i>	「束、房」
仏語	<i>chaume</i>	(複数で)「(穀物を借り入れた後の) 切り株」
西語、葡語	<i>cálamu</i>	「(バグパイプの) 菅」

5. 検証

さて、3. に示した仮説の妥当性を検証するために行わなくてはならない作業は、先に見た三つの現象が、一定の規則性をもって *Viadana* の言語変種でも起こったことを確認することである。

5.1. 語末第三音節に強勢がある語の中間母音の脱落

Rohlfis (1966: 172)によると、北イタリア方言の語末第三音節に強勢がある語の中間母音の変化は、言語変種ごとに異なるという。エミリア方言では、母音が消失し、ロンバルディア方言では母音が保持

される。以下に例を二つ示す。

ロンバルディア方言 *gumde* 「肘」 < lat. CUBĪTU(M);

エミリア方言 *gumbet* 「肘」 < lat. CUBĪTU(M);

ロンバルディア方言 *sémša* 「ナンキンムシ」 < lat. CIMĪCE(M).

エミリア方言 *simes* 「ナンキンムシ」 < lat. CIMĪCE(M).

さらに、AIS のデータを一瞥すると、ポー川北岸に位置する Viadana 周辺の言語変種は Rohlf's がロンバルディア方言として挙げている例に近いように思われる。(図 2 参照のこと。)

これらのデータが示すのは、CIMĪCE(M)や CUBĪTU(M)のように語末第三母音にアクセントのある語彙の語末第二母音が Viadana の言語変種では脱落しないということである。つまり CALĀMU(M)でも同様に語末第二母音は脱落しないであろうことを示しているのであり、我々の仮説は妥当ではないということになってしまう。

図 2



AIS, Karte 473, la cimice, le

地図中央を蛇行する太線が、ポー川本流。
途中大きく蛇行する部分にある大きめの
●が、Viadana。

しかしながら、実際には、ロンバルディア方言でも、語末第三音節に強勢がある語の中間母音が落ち

ているとされている一群の語彙がある。AIS に報告されている地点中で Viadana に最も近い 286 のデータによると、表 3 の語彙の様に語源の語末第三母音にアクセントがあるにもかかわらず語末第二母音が脱落している語彙が散見される。

表 3

<i>vert</i>	「緑」	< lat. VIRĪDE(M);
<i>cald</i>	「熱い」	< lat. CALĪDU(M);
<i>solt</i>	「金」	< lat. SOLĪDU(M) ,
<i>fret</i>	「寒い」	< lat. FRIGĪDU(M);
<i>di</i>	「指」	< lat. DIGĪTU(M)

Lausberg(1971: 267)は、これらの変化は俗ラテン語で起こっていると主張しており、同様の変化が起こった語彙として CALĀMU(M)も含めている。実際、表 4 の様に伊語と仏語には中間母音が脱落している語形が伝わっており、ロマンス語圏の広範囲で語末第二母音脱落が起こったと考えることができる。つまり、Lausberg(1971)の主張が正しければ Viadana の言語変種において CALĀMU(M)の語末第二母音が脱落しているという仮説も妥当だといえる。

表 4

伊語 *calmo* < CALĀMU(M)

仏語 *chaume* (< *chaulme*) < CALĀMU(M) (TLFi も参照のこと。)

5.2. 語末母音脱落と母音挿入

ロンバルディア方言では(低母音以外の)語末母音が脱落することが知られている。(Rohlf 1966: 180-183) その結果、語末に震え音からなる子音結節が形成された場合、語源にない母音が挿入されることが知られている。(Rohlf 1966: 471-472) 表 3 と同じく AIS の地点 288 からのデータの中から *inveren* 「冬」を例にとってみてみよう。AIS 上のデータから考えられる変化は以下のものである。

inveren < **invern* < HIBĚRNU(M) (TEMPUS)

この変化では、語末の母音が脱落した後、語源の子音結節-*rn* が語末の位置にくる。震え音からなる子音結節が語末の位置に形成された結果、その内部に語源にない母音が挿入されたと考えることができる。

CALĀMU(M)に議論を戻すと、5.1.でみた音変化の結果、子音結節-*lm*-が形成されたと考えることができる。さらにガロ・ロマンス語で広くみられる語末母音の脱落の結果、当該の子音結節が語末の位置

になり、その内部に母音挿入がおこるといふ複合的な変化も、この言語変種の音変化として差し支えないであろう。また Hall (2006)には、非語源的な母音が周囲の子音に同化する可能性が示唆されており、*calum* の円唇母音は両唇鼻音への同化の結果だと仮定するならば、その母音が語源の A から直接派生したものではないという一傍証になるであろう。

6. 結論

従来の研究では、*calum* の語源に関して、意味変化にのみ焦点が当てられていたが、本研究では同じ語彙の音変化に焦点を当てた。CALĀMU(M) > *calum* と著しく語形が変化してはいるが、CALĀMU(M) > *calmo* > **calm* > [kalum]と変化したと仮説を立てることで、当該語彙に Viadana の言語変種で起こった現象がおおむね規則的に適用された結果生じた語形であると、音変化の側面からも十分に主張することができる。

註

1 AIS から収集したデータは、著者の責任の下国際音声記号に変換してある。

参考文献

- AIS = Karl Jaberg, Jakob Jud (1928-1940). Sprach- und Sachatlas Italiens und Südschweiz. Zofinger: Ringer & Co.
- Badiali, Alessandro. (1983). Etimologie mantovane. Dizionario storico-comparato dei più tipici vocaboli nostrani. Sofir, Mantova.
- Foresti, Fabio (1988). Aree linguistiche V. Emilia Romagna. LRL 4: 569-593.
- Hall, Nancy (2006). Cross-linguistic patterns of vowel intrusion. *Phonology*, 23, 387-429.
- Lausberg, Heinrich (1971). *Linguistica romanza*. Vol. 1. Milano, Feltrinelli.
- Loporcaro, Michele (2009). *Profilo linguistico dei dialetti italiani*. Bari: Laterza.
- Pellegrini, Giovan Battista (1977). *Carta dei dialetti d'Italia*. PDI 0. Pisa: Pacini.
- REW = Wilhelm Meyer-Lubke (1935). *Romanisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg, C. Winter
- Rohlf, Gerhard (1966). *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti*. Vol. 1. Torino, Einaudi.
- TLFi = Trésor de la Langue Française informatisé (<http://atilf.atilf.fr/>)
- Vignoli, Mariano. (2019). Ceresara, terra di ciliegie e ciliegie. In: Marino Vignoli, *La Ciliegia di Ceresara* De.Co. Publi Paolini, Mantova.